

シェイクスピアと農業 (1)

— エリザベス朝「農書」の系譜 —

Shakespeare and Agriculture (1): A Genealogical Study of Elizabethan Husbandry Manuals

上村幸弘

UEMURA Yukihiro

【要旨】

農業経営に関する指南書、いわゆる農書は、すでに初期近代イングランドで広く読まれており、農業のみならず、社会生活全般にわたって倫理的規範を示してきたといわれている。それらがシェイクスピアの戯曲やその他の文学作品とどのような接点を持っていたのか、またエリザベス朝に至るまでにどのような変遷をたどってきたかを検証することがこのプロジェクトの全体的な作業となる。本稿はその第1章として、古代ギリシア・ローマの農業の状況から検証を行う。

【Abstract】

Husbandry manuals were widely read among the people in Early Modern England. These not only offered guidelines for farming, but also the normative ethics for every social class. We will examine how these manuals, whose roots have been traced back to ancient Greek poets like Hesiod, were connected to, and/or represented in, Shakespeare's plays and other contemporary writings in the Elizabethan era. In this paper, some husbandry manuals of the Greeks and Romans will be discussed mainly to establish agricultural ethics in classical times.

【キーワード】

農業倫理 (agricultural ethics)、農書 (husbandry manual)、ヴァロ (Varro)、ウェルギリウス (Virgil)、カエサル (Caesar)、カトー (Cato)、クセノフォン (Xenophon)、コルメラ (Columella)、シェイクスピア (Shakespeare)、パラディウス (Palladius)、ヘシオドス (Hesiod)、ホメロス (Homer)

序論

シャーロット・スコット (Charlotte Scott) は『シェイクスピアの自然』(*Shakespeare's Nature*)の中で「農業 (husbandry) は一種の道德基準を反映するようになり、それによって人間関係が形成されたり、判断されたりする」(10) ようになったとし、「農書 (husbandry manual) のイデオロギーはエリザベス朝文化の中に満ち溢れていた」(32) と指摘する。シェイクスピア (William Shakespeare, 1564-1616) とほぼ同年代で、劇作品も手掛けたジャーヴェイス・マーカム (Gervase Markham, c.1568-1637) は多作で知られ、農書『イギリスの農夫』(*The English Husbandman*) や料理書『イギリスの主婦』(*The English Housewife*) などの代表作がある。シェイクスピアの時代に、あるいはそれ以前から、このような農書が読まれるようになった背景には印刷技術の進歩などさまざまな理由が考えられるが、その一つが農業の担い手の変遷である。14世紀以降農奴制が衰退の時期に入り、土地保有者

と農業従事者の関係が大きく崩れ始める。また、この時期に黒死病がイングランドを襲い、農業人口が激減する。そのために新たな農業の手法が必要とされたとも考えられる。

「もう一言だけ敢えて申し上げておきたいことがある。たいていの場合同様、恐らく邪推で終わることは承知の上だが、それもこれもシェイクスピアに対する敬意ゆえである」と丁寧に断りながら、19世紀の文献学者スキート (Walter W. Skeat) はこう指摘する。「第4幕第4場、リア王の様子が語られる。

Crowned with rank fumiter and furrow-weeds,
With hor-docks, hemlock, nettles, cuckoo-flowers,
Darnel, and all the idle weeds that grow
In our sustaining corn—

冠っておられたのは繁殖力旺盛なカラクサケマンにアゼクサ、
ゴボウ、ドクニンジン、イラクサ、タネツケバナ、
ドクムギなど。何の役にも立たないこのような草は
私たちの糧となる穀物畑に蔓延っているのです。

私はフィッツハーバートが第20節(本書29ページ)にあげる雑草の一覧を思わずにはいられない」(Skeat xxix-xxx)。シェイクスピアがフィッツハーバート (Master Fitzherbert) の農書を実際に手元に置いていたか否か、それを論証する仕事は筆者の能力の及ぶところではない。しかし、シェイクスピアの農業に関する知識は、他の専門領域に関する知識を凌ぐものがある、とスピアー (Robert F. G. Spier) とアンダーソン (Donald K. Anderson, Jr) が「シェイクスピアと農業」(‘Shakespeare and Farming’) で語って久しい (*Agricultural History*, 59/3, July 1985)。ここでは、16世紀後半のタッサー (Thomas Tusser, 1524-80) の農書で用いられている農業用語とシェイクスピアの語彙が詳細に分析され、当時の文芸作品への農書の影響評価を行う口火を切った。

わが国において、この時代の農書の考証的研究は、加用信文の『イギリス古農書考』(1978)で集大成された感がある。さらに、飯沼二郎の『世界農業文化史』(1983)にも詳しい論考が収められており、日本の農書成立過程と比較対照しつつ、飯沼は巧みな論法でイギリス古農書成立との一致点を見出そうと試みる。さらに遡ると、『イギリス農業革命の研究』(1961)で小松芳喬は15世紀の第1次農地囲い込みの経緯を検証しながら、16世紀農書作家たちの立場を分析する。前述のフィッツハーバートの『農書』(*The Book of Husbandry*, 1534)やタッサーの『農業要訣五百箇条』(*Five Hundred Points of Good Husbandrie*, 1573, Rev. 1580)を紐解き、行政面で批判されることの多かった農地囲い込みがこれらの農書では肯定されていると、小松は指摘する。藤田幸一郎は『ヨーロッパ農村景観論』(2014)で、ともに和辻の『風土』(1935)への批判から始まる加用や飯沼らの立ち位置を「日本人のヨーロッパ農村景観論」として展開している。

本稿は、イギリスの中世後期以降の農書に纏わる知識や技術に関し、これらの先行研究に大きく依存していることを先ずはことわっておきたい。その上で、ルネサンス期の文学に記録された農業の表象が農書とどのような接点を持っているかについて倫理的側面からアプローチを試み、シェイクスピアの作品において農業 (husbandry) がいかに人々の価値観形成に関わっているかを検証する(第3章)。よって、農書の系譜を農書作家と農業従事者との社会的関係性から読み解き、農業と宗教に通底する自然

観を探ることが全体の作業となる。そのために、第 1 章で古代ギリシア・ローマの農業倫理について、第 2 章では中世から初期近代の農業倫理について検証を行うこととする。

第 1 章：古代ギリシア・ローマ世界における農業倫理

第 1 節：古代ギリシアの農業

1. ホメロスとヘシオドス

古代ギリシアの人文分野の著述を中心に、そこに描かれた人々の暮らし、特に、農業に焦点をあててその構図を描き出そうとした岩片磯雄の『古代ギリシアの農業と経済』（1988）は、ヨーロッパの農書の起源をたどる上で有益な指針となる。ホメロス、ヘシオドスの叙事詩を読み解き、ソクラテス、クセノフォン、プラトンから古代ギリシアの農業と経済の実態を炙り出す総合的な論究で、岩片は「古代ギリシア文化の華やかさの裏には、森林の荒廃と土壌の流亡という事実がある」とし、「古代ギリシアが残した各方面にわたる遺産を、正しく評価、賞讃するだけでなく、それが犯した過誤が、過去の歴史にとどまることなく、今日もなお繰り返されていることへの反省」(iii-iv) を促して静かな警鐘を鳴らす。

岩片の試みはフィクション（虚構）の中からファクト（事実）を読み取ろうとする古典的な文学解釈の一手法と言え凡庸に聞こえる。しかし、農学者としての視点で『イリアス』『オデュッセイア』に描き込まれた農業を科学的資料と突き合わせて検証し、古典ギリシア最古の農書『仕事と日』に繋げ、戦術と農業を論じる『オイコノモコス』を射程に入れることで、岩片はそれが確実に古代ローマの農業政策を立案する者たちに青写真を提供していることを論証した。

ここでは、古代ギリシアの古典が農業と労働をどのような倫理的観点から描いているかに焦点をあてながら、その変遷を見ていく。

Thence we sailed on, grieved at heart, and we came to the land of Cyclopes, an overweening and lawless folk, who, trusting in the immortal gods, plant nothing with their hands nor plough; but all these things spring up for them without sowing or ploughing, wheat, and barley, and vines, which bear the rich clusters of wine, and the rain of Zeus gives them increase.
(*The Odyssey*, vol. I, 311)

やがて、気持ちが沈みながらも船を進めると、キュクロプス族の国に到着した。傲慢かつ無法の民で、不死の神々を当てにして、自ら植えたり耕したりはしない。それでも、あらゆる作物が播種耕作もしないまま自然に生育し、小麦、大麦、それにワインの原料となる葡萄が豊かな実を結ぶと、ゼウスの雨が収量を増やす。⁽¹⁾

There again, by the last row of the vines, grow trim garden beds of every sort, blooming the year through, and therein are two springs, one of which sends its water throughout all the garden, while the other, over against it, flows beneath the threshold of the court toward the high house; from this the townsfolk drew their water.
(*The Odyssey*, vol. I, 241)

また、葡萄畑が途切れるあたりには、さまざまな野菜が整然とした畑で栽培されており、一年中、花が咲き乱れていた。あたりには泉が 2 つ湧き、その 1 つが農園全体に水を巡らせる。一方、他の 1 つは向かい側にある中庭の入り口の下を通って屋敷に向かう。住民たちはそこから

水を汲んでいた。

相前後するが、前段はオデュッセウスが訪れるキュクロプス族の様子、そして後段の描写はアルキノオス王の館を取り巻く農場である。『オデュッセイア』が書かれた紀元前 8 世紀頃の農業が灌漑の整った果樹園や田畑を擁するアルキノオスの農場に近いとは想像に難くないが、前段のキュクロプス族の畑の様子は、ゼウスの父神クロノスが君臨する世界に似る。ヘシオドスは『仕事と日』(*Erga kai Hemérai: Works and Days*) で人間の黄金の時代を次のように描く。

For previously the tribes of men used to live upon the earth entirely apart from evils, and without grievous toil and distressful diseases, which give death to men.

(*Works and Days*, 95)

というも以前、人間という種族は邪悪なものとは全く無縁にこの地上で暮らしており、死をもたらす悲痛な労働に煩わされたり、悲惨な病気に罹ることもなかった。

『オデュッセイア』に見られる整備された農園をヘシオドスの文脈で読み直すならば、悲痛な労働に煩わされながら創り出された景観ということになる。

ヘシオドスの作品は紀元前 700 年前後に成立したとみられ、自伝的な要素が多分に含まれている『仕事と日』に描かれた農業は、その時代のギリシア周辺の実態を反映したものと見てよいだろう (Blois 78)。人類が神々とともに暮らすギリシア神話の世界では、ヘシオドスが描く五時代の説話のうち、最初の黄金の種族はクロノスがまだ天上に君臨していた時代で、「まさに神々の如く、憂いから解放されて暮らし、労苦も苦痛も全く知らずにいた」(‘just like gods they spent their lives, with a spirit free from care, entirely apart from toil and distress’ 97)。ホメロスが単眼の巨人キュクロプス族の国を黄金の種族に近い形で表現している意図は—「別種の楽園」(‘a different sort of paradise,’ Welkins and Hill 253) としか言いようがなく—測りかねるが、前後の文脈より周辺の自然環境が人類未踏の地であることから、原始の自然と黄金の種族とをオーバーラップさせたと十分に推察ができる。このように、ホメロスとヘシオドスには、人類が生活の糧を得る方法が大きく 2 つ描かれている。糧は労働によらずとも神によって与えられるものであること、また糧は人が労働により整然と田畑を耕して得られるものでもあるということである。このとき、ヘシオドスは農作を行う労働を「憂い」「苦労」「苦痛」といった言葉を伴って表現し、農作業が苦役であるとする背景を次のように説明している。

ヘシオドスの『神統記』(*Theogonía: Theogony*) では、ゼウスとプロメテウスの対決の結果、ゼウスが勝利して女という災禍が人類に送り込まれる。プロメテウスが人類のために盗んだ善きもの(火)への懲らしめとしてである。

.....in just the same way high-thundering Zeus set up women as an evil for mortal men, as partners in distressful works. (*Theogony*, 51)

正に同様にして、天上で雷を操るゼウスは、女を死すべき男どもにとっての災禍として拵えた。すなわち悲惨な労働の連れ合いとして。

こうして男と女が連れ添う場合も、敢えて連れ添わぬ場合も、いずれにしても逃れることのできない苦悩の生（「悲惨な労働」）をゼウスは人類に課す。『神統記』に描かれるゼウスの怒りに発した人類への災禍となる女は、『仕事と日』の中でパンドラという名が与えられ、その役割が具体化されていく。

But the woman removed the great lid from the storage jar with her hands and scattered all its contents abroad—she wrought baneful evils for human beings. Only Anticipation remained there in its unbreakable home under the mouth of the storage jar, and did not fly out:
(Works and Days, 95)

しかし、女は甕の大きな蓋を手を使って開けてしまったので、その中身がすべて飛び出した。これは人類にとって破滅的な災禍をもたらすこととなった。唯一、希望だけがその不滅の館に残り、甕の縁に留まって、飛び出さなかった。

さらに、『仕事と日』には『神統記』にはない別の要素が加わる。

For the gods keep the means of life concealed from human beings. Otherwise you would easily be able to work in just one day so as to have enough for a whole year even without working.....
(Works and Days, 91)

というのも、神々が人類の命の糧を隠してしまっているからだ。そうでなければ、わずか一日働くだけで、まる一年分の食糧を得られて、あとは働かなくてもよいものを。

これまで自然に稔っていた果実や穀物が、神々によって隠されてしまったため、人間は働いて食糧を確保せねばならないという、労働の必要性が加えられる。ヘシオドスによれば我々は第 5 の種族であり、鉄の種族の時代であるという。

And they will not cease from toil and distress by day, nor from being worn out by suffering at night, and the gods will give them grievous care. Yet all the same, for these people too good things will be mingled with evil ones.
(Works and Days, 103)

昼間は苦役に苛まれ、夜間は苦難に困憊することだろう。神々は人類に苦しみの種を与え給う。しかしそれでも、災禍に混じって良いこともやがては訪れよう。

こうして神話の世界を舞台に、甕から飛び出した災禍と人類との戦いが始まった。人類は神々が隠した命の糧を求め、逃れることのできない賦役を課される。ただし、第 3 の種族である青銅の種族の時代にはすでに「彼らの武器は青銅で、青銅が彼らの住まい、青銅を使って仕事をしたが、黒い鉄はまだなかった。」（‘Their weapons were of bronze, bronze were their houses, with bronze they worked; there were not any black iron.’ Works and Days, 99）とあるから、黄金の種族とは決定的な違いはこのあたりから始まるのかも知れない。

『仕事と日』ではヘシオドス自身の実弟ペルセスとの遺産相続の問題が取り上げられ、特に土地の相

続をめぐって、不正に実弟に奪われた権利への不満が根底にある。しかし、岩片も指摘する通り、後に見るクセノフォンの場合と異なり、「労働の意義を確信したヘシオッドは、自ら労働の担い手であるという立場にたって道義を説き、支配者としての地方貴族を論難する」(岩片 220)。故に、ヘシオドスがペルセスに語る次の言葉にはリアリティーがある。

When the ploughing-time first shows itself to mortals, set out for it, both your slaves and yourself, plowing by dry and by wet in the plowing-season, hastening very early, so that your fields will be filled. (Works and Days, 125)

耕耘の時期が人間に示されれば、取り掛かれ。奴隷たちもお前自身も。乾いていようと濡れていようと、耕耘の季節になれば耕し、早くから取り組み、そうすれば畑も豊作は間違いなしだ。

古代ギリシアで「定着農業に移行した当初には、土地は氏族の共有であり、これを各家庭に割当てて耕作していた」(岩片 206)とされ、「働いているのはテーテスと呼ばれる一種の賃労働者か、あるいは奴隷である」(210)。しかし、一方でブルクハルトは「ヘシオドスの『仕事と日』において、農奴がどの程度まで実際に奴隷と考えられるか、という問題は依然として不明である。しかし真面目な農業労働をまだ下賤な仕事と見なさず、むしろ掛け替えのない浄福と見なしていることは疑いない」(第1巻 204)と指摘している。

ホメロスの奴隷の捉え方も、ヘシオドスに近いかもしれない。放浪の末、20年の歳月を経て故国に帰還したオデュッセウスは、見事に耕された農園に着く。

But Odysseus and his men, when they had gone down from the city, quickly came to the fair and well-ordered farm of Laertes, which he had won for himself in days past, and much had he toiled therefor. There was his house, and all about it ran the sheds in which ate, and sat, and slept the servants that were bondsmen, that did his pleasure.

(The Odyssey, vol. II, 417)

しかし、オデュッセウスらは町を去ったかと思うと、あっという間にきれいに整備されたラエルテスの農場に着いた。これを手に入れるのには時間がかかり、それに伴う苦労も相当なものであった。家の周りには納屋が建ち並び、そこで下僕たちが寝食を共にしていた。彼らはラエルテスの思いのままになる奴隷であった。

オデュッセウス王の実父ラエルテスは、貧しい身なりで自ら農作業を行い、奴隷たち (bondsmen) がそこで労役に服しているとある。ヘシオドスがペルセスに語って聞かせるときにも「奴隷たち (slaves) もお前自身も」とあった。土地を管理している者が、奴隷と物理的に近い距離で農業に従事している様子がうかがえる。

このように、紀元前8世紀頃のホメロスとヘシオドスの時代、人類がなぜ農業を営むようになったのかということが、神との関係性において定義されていく。ただし、ヘシオドスのような教訓詩では詩人のアイデンティティが表出し、ホメロスの謳う英雄叙事詩では詩人の個性が秘匿される (Finley 89) という表現法の相違はある。農作業のすべてを奴隷の労働力に依存していたことは言うまでもないが、

その奴隷を監視するのもまた奴隷の仕事であった。次節のクセノフォンでは労働管理の在り方が主題になる。

2. クセノフォン『オイコノミコス』

さて、ホメロスやヘシオドスの時代から 300 年ほど時代が下った紀元前 4 世紀前半、クセノフォン (Xenophon) の『オイコノミコス』 (*Oikonomikos: The Oeconomicus*) が著される。クセノフォンはソクラテスを師と仰ぐプラトンらと同時代の文人であるが、その経歴はペルシア反乱軍としてギリシア傭兵隊を統率する指揮官となったり、アテネとスパルタの軍事対立に翻弄されるなど、終生アテネに戻ることなくコリントスでその生涯を終えた。『オイコノミコス』はオリンピア近郊のスキルス村で荘園主となり、妻子と過ごした 20 年ほどの平穏な時期に書かれたとされる。

『オイコノミコス』は『家政論』とも訳されることがある。文字通り、家政とは何か、財産とは何かを問うもので、ソクラテスに関する言行録としての対話篇である。対話はソクラテスとクリトブロスの話をクセノフォンが聞いているという設定で始まり、農業に関する話題はソクラテスと資産家イスマコスとのやり取りをクリトブロスに語り聞かせるという複雑な構成を取る。

“The truth is, whereas other artists more or less conceal the most important points in their own art, the farmer who plants best is most pleased when he is being watched, as the one who sows best..... So farming, Socrates, more than any other calling, seems to produce a very noble disposition in its followers.”
(*Oeconomicus*, 513)

「真実を言えば、他の職人たちが多少なりとも自分たちの技術の重要なポイントを隠している一方で、見事に作付けをする農民は、見られていることをたいそう嬉しく思うものです。きれいに種を播く者たちも同様です。……ですから、ソクラテス、農業は他の職業以上に、従事する者にはとても気高い精神が宿るように思えるのです。」

農民が勤労それ自体に喜びを覚え、他人との技術共有をむしろ好み、農作業を通して精神性を高めるという発想が、ホメロスやヘシオドスにあったらどうか。ローブ古典叢書の編訳者が言うように、「勤労の美德、専門知識、計画性、誠実な取引、主婦の価値」等、ヘシオドスを想起させる伝統的な言い回しが多いことは事実であるが、「クセノフォンの思想はこういった伝統的な教えと比べ、はるかに進歩し、見識を備えている」(Marchant 382-83)。ヘシオドスとクセノフォンの農業技術論の比較は岩片に詳しいが、同時に「彼(クセノフォン)の著作がヘシオドスとは異なって、自ら汗を流して働いた経験にもとづくものではなく、農業の運営は監督に任せ、自らは馬に乗って管理に赴くに過ぎない立場から書かれたもの」(岩片 90)と、クセノフォンへの評価は低い。確かに、スキルス村に隠棲したクセノフォンとイスマコスを重ねることもできるだろう。

“And when you want a foreman, Ischomachus, do you look out for a man qualified for such a post, and then try to buy him—when you want a builder, I feel sure you inquire for a qualified man and try to get him—or do you train your foreman yourself?”

“Of course I try to train them myself, Socrates. For the man has to be capable of taking charge in my absence; so why need he know anything but what I know myself?”

(Oeconomicus, 493)

「では、イスコマコス、もし畑の監督者を必要とするなら、君はそのようなポストに相応しい人間を探し、奴隷として買い付けるのだろうか。ちょうど大工が必要な時に、きちんとした技術を持った男かどうかを調べてから、彼を雇うようにね。それとも、監督者を君自身の手で教育すると言うのだろうか。」

「もちろん、自分自身で教育します。ソクラテス、それというのも、その男は私の不在時には責任を取る能力がなければなりません。ですから、彼は私が知っていること以外、何を知る必要があるでしょうか。」

イスコマコスによれば、畑の監督は雇った男に任せるが、その監督者の教育は自ら行うと言う。自ら額に汗することなく、奴隷に農作業をさせ、それを監督する者を土地所有者の意のままに教育することこそが、『オイコノミコス』の主眼である。これは、畑の監督者に限らず、召使い頭や妻を戦略的に教育することにも通じるとクセノフォンは言う。

“Of course it is,” cried Ischomachus; “but I grant you, Socrates, that in respect of aptitude for governing, which is common to all forms of business alike—farming, politics, estate management, warfare—in that respect the intelligence shown by different classes of men varies greatly.”
(Oeconomicus, 553)

「もちろん、そうです。」とイスコマコス声を大にした。「しかし、ソクラテス、管理する才能については、あらゆる業態に共通したものです。農業、政治、土地運用、それに戦争にも当てはまります。その点でいうと、レベルの異なる人間が示す知性によって、結果は大いに違ってきます。」

「既に、指摘されるように、ウェルギリウスの『牧歌』や『農耕詩』より 200 年も早くから田園生活の有意義さと心地良さに注目していたのであり、そのため、クセノフォンの農業観は、ローマ人達の農耕生活に大きな影響を与えたといわれている」（越前谷 180）という解釈も成立する一方で、クセノフォンが国家の政と農業経営をパラレルに論じる姿勢は、文学性を担保しながら荒廃したローマ農業再興を静慮するウェルギリウスの姿勢に自然と重なってゆく（第 2 節-2 参照）。

第 2 節：古代ローマの農業

1. カエサル『ガリア戦記』

紀元前 58 年、ユリウス・カエサル (Julius Caesar, BC.100-BC.44) はガリア総督となる。ガリアの多数の部族を制圧し、ゲルマニア人とも対峙する模様は、カエサル自身の『ガリア戦記』(Commentarii de Bello Gallico: The Gallic War) で詳らかにされる。ここでは『ガリア戦記』におけるカエサルの農業の捉え方を検証するところから始め、その前後の時代の農業倫理を考える手掛かりとしたい。

But a worse fate has befallen the victorious Sequani than the conquered Aedui: Ariovistus, king of the Germans, has settled within their borders and seized a third part of their

territory, the best in all Gaul; and now he orders them to evacuate another third, because a few months since 24,000 of the Harudes joined him, for whom he had to provide a settlement and a home. *(The Gallic War, 49)*

しかし、敗者アエドゥイ族より勝者であるセクアニ族に厳しい運命が待ち受けていた。ゲルマンの王アリオウストゥスが領内に留まり、ガリアでも最上の土地3分の1を接收してしまい、さらにはあと3分の1を明け渡すように要求している。というのも、数か月前に2万4千のハルデス族がアリオウストゥスの援軍に加わったため、彼らに入植地と棲家を与えねばならなかったからである。

アエドゥイ族とセクアニ族とのガリア内部での対立で、セクアニ族はゲルマニア傭兵に支援を求めるが、結果、母屋を取られる形になる。その後もガリアの豊かな土地を求めてゲルマニア人のレヌス(ライン)渡河が絶えない。『ガリア戦記』は領土争奪の物語であり、土地を巡る駆け引きが重要な要素となる。軍事戦略上重要な土地、輜重部隊が食糧調達を行うための耕地、さらにはアリオウストゥスがハルデス族に行っているような土地分配のほか、退役軍人への報酬としての土地の分配も指揮官は考慮せねばならなかった。ガリア総督就任7年目の戦争が最も激しい戦闘であったと言われている。カエサルがイタリアで政争に巻き込まれているとの噂が立つと、ガリア全土の属州で部族が個別に決起し、やがてそれらが統合されていく。アルウェルニ族の若頭ウェルキングトリクスは困窮者や命知らずの無頼漢を募りながら、各地の部族に武器を取れと鼓舞する。しかし、カエサルはこのガリア全土の蜂起も制圧すると、兵士を冬期陣営で休息をとらせるつもりになっていた。ところが新たな共同謀議の情報に接したため、急遽ビトゥリゲス族の穀倉地帯に向かう。

The sudden coming of Caesar brought the inevitable consequence on a folk dispersed and unprepared. They were tilling their farms without the least fear and they were caught by the cavalry before they could flee for refuge into the strongholds. For even the ordinary sign of a hostile inroad (which is usually perceived by the wholesale burning of farm buildings) had been omitted by Caesar's command, in order that his supply of forage and corn might not run short if he should wish to advance further, nor the enemy be frightened by the conflagrations. *(The Gallic War, 519)*

シーザーの突然の到来は、散らばって作業をしていて身構える余裕もない人々に必然的な結果をもたらした。全く警戒もせずに畑を耕していたため、城内に逃げ帰る間もなく騎馬隊に捕えられてしまった。通常であれば行う侵攻の合図(納屋などに見境なく火を放って知らしめるのが常であるが)、それもシーザーの命令で中止された。糧秣や穀物の調達が滞るのを防ぐためである。さらにこの先に進軍することもありうることだし、大火事を見て敵に逃げられても困るからであった。

カエサルは進軍および部隊展開のための食糧確保を重視し、攻城の慣例を破って都市を急襲する。強力な敵軍隊が迫っていることが察知された場合、村の穀倉や田畑が焼き払われたのちに村民全員が逃避する場合もある。ビトゥリゲス族の場合は城壁に守られた都市であったが、農夫たちは壁内に逃れる間も

なくローマ軍に捕えられてしまう。占領される前に敵の食糧補給路を断つ自爆手段が使えず、カエサルの術中に嵌まる。この時カエサルが率いた軍隊は、第 11 軍団と第 12 軍団。それぞれ 2 個大隊を残して輜重を守らせているので、残りの兵士はおおよそ 1 万といったところだろうか。粗食であったとはいえ、大軍団の食糧確保は大きな問題であった。

ローマ軍の食糧調達や兵士の食事については、塚田孝雄の『シーザーの晩餐』に詳しい。「兵士がめいめい 1 日に 3 ポンドの穀物を受け取り、紀元 3 世紀のブリタニア国境守備軍が 2 万 5 千人に達したとすれば、1 日の穀物消費総量は 33.5 トンに及ぶ」(122) という。1 万の兵士であれば、単純計算で 1 日に 13.5 トン必要ということになる。塚田によればローマ軍の平時における食糧調達の補給路は主に 2 つ。属州の住民たちから公定価格による徴発または強制買い上げの形をとる方法と、陣営の周囲に広がる占有地域での耕作であったという。一方、ローマの都市人口は 100 万人程度であったとされ、「この巨大な人口を支える穀物の年間必要量は、1 人当たりの年間消費量の推定量から算出して 3,000 万モディウス (約 20 万トン) と 4,000 モディウス (約 27 万トン) とも言われる。こうした穀物の大部分は海外、とりわけアフリカ、エジプト、シキリア、サルディーニアといった属州からの税・地代ならびに輸入品として調達されたと考えられる」(宮寄 53-54)。

したがって、大軍団の戦地での食糧調達や巨大都市ローマの現実を考慮すれば、事項以降に論ずる農業論は、ごくわずかな国内生産に資するものでしかないかもしれない。そうであってもなお、農書が書き継がれていくのは、それがもはや技術的な指南書の域を超えた意味を持ち始めているからである。

2. ウェルギリウス『農耕詩』

ローマ建国の英雄アエネアスを謳った『アエネイス』(*Aeneis: Aeneid*) で知られるウェルギリウス (Publius Vergilius Maro, BC.70-BC.19) の『農耕詩』(*Georgica: Georgics*) は、次のように始まる。

What makes the crops joyous, beneath what star, Maecenas, it is well to turn the soil, and wed vines to elms, what tending the cattle need, what care the herd in breeding, what skill the thrifty bees—hence shall I begin my song. (Georgics, 99)

どうすれば豊かな稔りを得られるか、いかなる星のもとで土を返えし、マエケナスよ、楡の支柱に葡萄を絡ませればよいものか、畜牛にはいかなる世話が、仔牛にはいかなる育て方が必要か、勤勉な蜜蜂を養う技術とは何か、これから私はそれを謳う。

紀元前 36 年頃に書き始められたと言われる『農耕詩』はマエケナス (Maecenas) の勧めによるものだった。マエケナスはウェルギリウスだけでなく、ホラティウス (Quintus Horatius Flaccus) など当代一級の文芸家を多数保護したパトロンで、後にローマ帝国初代皇帝アウグストゥス (Imperator Caesar Divi Filius Augustus) となるオクタウィアヌス・カエサル (Gaius Julius Caesar Octavianus) の政治顧問を務めた。ここに謳われているように「穀物」「樹木」「畜牛」「蜜蜂」について、この後、順を追って各々の方法論が述べられていくので、一見、農書の形式を取ってはいる。例えば、樹木の巻では挿木や接木の技法が扱われているのは、カトーの『農業論』でも、さらには同じく紀元前 3 世紀のテオプラストス (Theophrastos, BC.371-BC.287) の『植物誌』(*Historia Plantarum*) にもすでに記述があるので驚くべきことではない (本稿では自然を操作するという観点から、ルネサンス期の自然哲学を論じる際に改めてウェルギリウスの方法論に触れることとする)。しかし、『農耕詩』は農書としての機

能以上に、「こういった作品が繰り返し教える生活スタイルは、質素、安定性、純潔といった美德に基づく道徳的実直さである」(Putnam 5) という教訓的な特徴が強い。

マエケナスがウェルギリウスに農業に関する詩を勧めたのは、当時のローマの農業が内戦により荒廃していたため、農業振興という政策的側面を持っていたと言われている。さらに、オクタウィアヌスが退役軍人に土地の分配を行った際、ウェルギリウス自身も故郷マントヴァの土地を没収されているが、このようにして農業を経験したことのない元兵士に農地が引き渡されることで、ますますローマの農業の担い手が減少した。詩人自身の個人的な思いとは別に、ローマ農業の復興が『農耕詩』の出発点には確かにあった。ところが、『農耕詩』は、庶民の実用にも為政者の政策にも直接的・具体的に役立つものではなかった。それは、神話、宗教、歴史、哲学、自然科学などの知識を、大地に生きる人間の視点からとらえなおした洗練された創作、つまりまさに文学作品にほかならなかったのである」(小川 219)。

Before the reign of Jove no tillers subjugated the land: even to mark possession of the plain or apportion it by boundaries was sacrilege; man made gain for the common good, and Earth of her own accord gave her gifts all the more freely when none demanded them. Jove it was who put the noxious venom into deadly snakes, who bade the wolf turn robber and the ocean swell with tempest, who stripped honey from the leaves, hid fire from view, and stayed the wine that once ran everywhere in streams, so that experience, from taking thought, might little by little forge all manner of skills, seeking in ploughed furrows the blade of corn, striking forth the spark hidden in the veins of flint. (Georgics, 107-109)

ユピテルの統治以前には、土地を耕す者などなかった。土地の所有を示す印を付けたり、境界線を引いて区分することも禁じられていた。共通の利益だけが人の得られる利益であった。大地は、求める者がいなくても進んでその恵みを気前よく与えていた。しかし、ユピテルこそが忌まわしい蛇に毒薬を注ぎこみ、狼には略奪を、海洋には荒れ狂うことを命じた張本人であり、樹木から蜂蜜を奪い、火を隠し、至る所に流れていたワインの川を堰き止めた。その結果、経験を通して、熟慮を重ね、徐々にさまざまな技術を発達させていった。やがて、耕された畝からは穀物の芽が伸びるのを発見し、火打石の鉱脈に秘された火花を着火させた。

ヘシオドスの紡ぎだしたクロノスからゼウスへの権力の移行期を経て、人類が神々の楽園との訣別を決定的にしたプロメテウスの仕業を敢えて削ぎ落としたウェルギリウスは、ユピテルの本意を次の如くに付度する。

The great Father himself has willed that the path of husbandry should not run smooth, who first made art awake the fields, sharpening men's wits by care, nor letting his kingdom slumber in heavy lethargy. (Georgics, 107)

父神みずからが望んでおられたのは、農業の道が安易であってはならないこと。従ってユピテルは技術をもって大地を目覚めさせることで、大地への介入が必要であるとの人類の認識を鋭敏にし、神の王国を怠惰な眠りにつかすまいと目論まれた。

「その結果、経験を通して、熟慮を重ね、徐々にさまざまな技術を発達させていった」との解釈を加え、農業技術分野における人類の進歩をユピテルの胸のうちの構想と見る。

ケアリーとハールホフの次の指摘は傾聴に値する。「ウェルギリウスの『農耕詩』は、外見上、農業指南書という点でヘシオドスの『仕事と日』のラテン版ということになるのだろう。しかし、両者の思いは農業技術の指南にあるのではなく、彼らがまとめ上げた哲学そのものにある。この古代イタリア人の大地に対する思いが、胸の内に宿る情熱の一つと言えよう。彼は大地の中に生活の糧の源泉だけでなく、心に平安を与えてくれるものを見出そうとしている。それこそ戦後世代が渴望したものである。大地に創造力溢れる作品を作り上げ、自然の驚異を沈思することこそ、真に命を尊ぶことにつながってゆく」(266)。ヘシオドスのように人類と神々との関係性の中に労働の意義を見出すのではなく、ウェルギリウスの『農耕詩』は、やがて『アエネイス』という国民的叙事詩へとつながるローマの復興が根底にある。

「(歌いだしの数行は、)単にトピックを網羅したリストではない。ヴァージルは穀物や犁耕、畜牛や蜜蜂について謳うとは言うておらず、むしろ自然と農耕の相互関係、農業が必要とし、頼るべきものをはっきりさせようとしている。*hinc* (これから) という語が示すように、それがこの詩の歌いだしとなっている」(17)とパトナムが述べているように、『農耕詩』は、マエケナスに対してではなく、神々に対してでもなく、人類が自問しながら農業技術の発展可能性を探ろうとするように聞こえる。大地と向き合うことによって技術の開発発展につなげ、農作業に喜びを見出すのはクセノフォンの『オイコノミコス』の労働観に似る。この労働の喜びは、もはや農業が人類に対する賦役ではなく、神々との間で成立した和解とも読める。

3. カトー『農業論』

マルクス・ポルキウス・カトー (Marcus Porcius Cato, 234-149 B.C.) は青年期までローマにほど近いラティウム地方にある父の農場で過ごし、17歳で従軍した。その後、共和制時代の政治家として雄弁家でならし、監察官などの行政職も務めた。軍人としても政治家としても、貴族的な華美を嫌い禁欲節制に徹したと言われている。後年、奴隷を使った大農場を経営した。カトーの『農業論』(*De Agri Cultura: On Agriculture*) は自らの農場経営のために書かれたか、友人や隣人のために書かれたとも言われているが、体系的に整理されたものではない (Ash ix-xiii)。

ローマ帝政時代の著述家プルタルコス (Plutarchus, 46-127 A.D.) はその『英雄伝』の中でカトーを取り上げ、次のように述べている。

He was amazed to hear them to tell how Cato, early in the morning, went on foot to the market-place and pleaded the cases of all who wished his aid; then came back to his farm, where, clad in a working blouse if it was winter, and stripped to the waist if it was summer, he wrought with his servants, then sat down with them to eat of the same bread and drink of the same wine. (Plutarch's Lives, vol. II, 309-310)

彼 (ウァレリウス・フラックス) は下僕たちが話すカトーの生活を聞いて驚いた。カトーは早朝から徒歩で広場 (市場) へ出向き、助けを求めるすべての者の弁護を行い、それから農場に帰って行った。冬場は作業着ひとつ、夏場は上半身裸で、奴隷たちとともに作業し、腰を下ろして同じパンを食べ、同じワインを飲んでいた。

「古き時代の厳格なローマ人の精神」「質素の極み」(Ash xiii) を体現する人格者として、指導的立場にあったことが窺える。いわゆるクセノフォンのような馬上の指揮官ではない。

Be a good neighbour, and do not let your people commit offences. If you are popular in the neighbourhood it will be easier for you to secure extra hands. If you build, the neighbours will help you with their work, their teams, and their materials; if trouble comes upon you, which God forbid, they will be glad to stand by you. *(On Agriculture, 13)*

よき隣人たれ。使用人たちには悪事を働かせぬように。近所付き合いが良好であれば、人手を確保することもたやすい。建屋を造るときなども手伝ってくれたり、仲間を集めてくれたりすることもあるろうし、また材料を提供してくれることもあるだろう。仮にトラブルに巻き込まれたような場合にも、喜んで味方に付いてくれるだろう。

およそ後述するパラディウスの農書では語られることのなくなる共同体での人間関係や、奴隷の管理の仕方について、カトーは入念な記述を行う。

He must settle disputes among the slaves; and if anyone commits an offence he must punish him properly in proportion to the fault. *(On Agriculture, 13)*

彼（農地の監督者）は奴隷の間の争いを治めなければならない。もし罪を犯した者がおれば、その程度に応じて罰を与えなければならない。

確かにカトーはクセノフォンと同じく軍隊の指揮官としての経歴があり、農場の使用人（奴隷）を統率する必要性から監督者の育成を重視している。カトーの農業倫理は土を愛するという本能的なものに基づきつつ、それを理論化する際には、政界における激しい政争を生き抜き、戦場における厳しい規律に耐え抜いたキャリアが、説得力のある現場主義に反映されている。

4. ウァロ『農業論』

マルクス・テレンティウス・ウァロ (Marcus Terentius Varro, BC.116-BC.27) の『農業論』(*Res Rusticae: On Agriculture*) は、カトーの『農業論』のおよそ 100 年後に著された。ウァロは政治的にはポンペイウス派を支持してカエサルと対立するが、ファルサルスの戦いに敗れてカエサルの恩赦を受ける。カエサル政権下ではギリシア・ラテン文学専門の図書館の運営を任されるものの、カエサル暗殺後は、政権を取ったアントニウスによって追放される。アクティウムの海戦でアントニウスが敗れると、ウァロはオクタウィアヌスを介してマエケナスの保護を受け、晩年を研究と著述に費やした。600 を超える論考があったと伝えられているが、現存するものは『農業論』の他にごくわずかな断片が残るだけである。

ウァロは『農業論』を 80 歳から書き始め、妻フンダニア (Fundania) に捧げている。全 3 巻からなり、第 1 巻は農業、第 2 巻は畜牛、第 3 巻はその他の家畜をそれぞれ扱う。簡明さと言う点で、また作品の規模という点で、コルメラ (Lucius Junius Moderatus Columella, AD.4-AD.70) には及ばないも

の、極めて実用性が高く、ウェルギリウス、プリニウス、コルメラ自身にも影響を与えたと言われている (Hooper xviii)。

第1巻はローマ12神への呼びかけから始まり、次にギリシア・ローマの農業分野の専門諸家の名が読み上げられる。ここにソクラテス門下のクセノフォンの名があがるのは言うまでもない。農業の女神セレス (Ceres) と大地の女神テルス (Tellus) を讃える農業祭 (Sementivae) に招待を受けたという設定で、ウァロは義父ガイウス・フンダニウスらと主催者を待ちながら農業談義を行う。

Glancing at Scrofa, Stolo said: "You are our superior in age, in position, and in knowledge, so you ought to speak." And he, nothing loath, began: "In the first place, it is not only an *art* but an important and noble *art*. It is, as well, a *science*, which teaches what crops are to be planted in each kind of soil, and what operations are to be carried on, in order that the land may regularly produce the largest crops." [emphasis added] (On Agriculture, 185)

スクロファの方を見やりながらストロはこう言った。「年齢でも、社会的地位の点でも、また見識という点から言っても、あなたに優る者はおりません。どうか教えて下さい。」するとスクロファは嫌がることもなくこう始めた。「第一に農業は単なる技術というだけでなく、重要かつ高貴な技術なのです。同時に農業は科学でもあります。どの作物のどのような土壌に植えるべきか、またどのような作業を行えば、大地が恒常的に最大限の収量を生み出すかを教えてくれるのです。」

スクロファはローマで最も農業技術に秀でた人物と紹介されている (173)。技術 (*ars*: art) と科学 (*scientia*: science) については、いずれルネサンス自然科学を扱う章で詳しく述べるが、スクロファによると農業はすでに体系化され、最大収量を生み出すための技術が確立しているような口ぶりである。

"The chief divisions of agriculture are four in number," resumed Scrofa: "First, a knowledge of the farm, comprising the nature of the soil and its constituents; second, the equipment needed for the operation of the farm in question; third, the operations to be carried out on the place in the way of tilling; and fourth, the proper season for each of these operations. Each of these four general divisions is divided into at least two subdivisions..."

(On Agriculture, 189)

「農業を大きく分割すると4つに分けることができます」とスクロファは話し始めた。「第1に農場に関する知識。これは土壌やそこに含まれる成分の特性なども含まれています。第2にいま述べた農場を作業していく上で必要な機具。第3に耕耘を実施する場所で行う作業。第4にこういった作業を行う適切な時期の問題ということになります。さらにこれら4つの大項目はそれぞれが少なくとも2つずつに細分化されます……。」

このようにウァロは技術論をスクロファに語らせることにより、理論から実践の間に教育的な手法を取り込む。政局に翻弄されながら、後世に対して影響力のある農書が残せたのは、伝統的な古典文学の知識と技法に基づきつつも、先達の農業論を丁寧に整理して、後継者を育成する意識があったためである。

Wherefore, since you have bought an estate and wish to make it profitable by good cultivation, and ask that I concern myself with the matter, I will make the attempt; and in such wise as to advise you with regard to the proper practice not only while I live but even after my death. (On Agriculture, 161)

なるほど、お前はすでに土地を求め、できることなら手際よく農作業に取り組みたいのであろう。そのことについて私の助言を求めているのであるから、できる限りのことは教えてやろう。その適切な取り組みに関して私の存命中のみならず、死後にも役立つように。

カトーが『農業論』を書いた時の意識とは明らかに異なり、後進の指導への配慮が滲む。ウァロの農書の評価が高いゆえである。

5. コルメラ『農業論』

ルキウス・ユニウス・モデラトゥス・コルメラ (Lucius Junius Moderatus Columella) の出自に関することはほとんどわかっていない。自らが偶然作品の中で言及していることおよび同時代の作家の言及からかろうじてその一部が推測されうるだけである。そういった情報を総合すれば、コルメラはスペイン南部のバエティカ地方ガデス (現在のカディス) の出身で、紀元1世紀前半の生れである。祖父とウァロが同時代人であり、自らはセネカ (Lucius Annaeus Seneca, circa BC.4-AD.65) や大プリニウス (Pliny the Elder, 23-79) と同じ時代を生きた。両親の名前は作品中に出てこないが、叔父マルクス・コルメラ (Marcus Columella) の名は敬意を込めて何度も触れられる。叔父はバエティカ地方の熟練の農業従事者であり、ウァロ自身若い頃そこで農作業をして過ごしたようである。いつ頃ローマに出てきたかは定かでないが、ラティウム地方およびエトルリア地方で農場経営をしていたことはわかっている。また、シリアおよびキリキアで従軍しており、イタリア南東部タレントウムで従軍中に死亡したと思われる。カトーやウァロとは異なり、政権中枢の主要人物との関わりは持たなかったようである。『農業論』 (*Res Rustica: On Agriculture*) 全12巻はプブリウス・シルウィヌス (Publius Silvinus) という人物に捧げられており、ローマ人著述家の農業関連全論考中、最も包括的で体系的なものとなっている (Ash xiii-xvii)。

第1巻は土地の選択を含む農業総論。第2巻は耕耘および土壌について。第3~5巻は樹木の植え付け、接木、剪定等。第6巻は家畜について。第7巻は小型の家畜。第8巻は家禽や淡水魚。第9巻は養蜂。第10巻は6歩格の詩行によって園芸について語られる。第11巻はシルウィヌスの要請で畑地の監督者。第12巻は監督者の妻とその務めについて書き足された (Ash xvii-xviii)。

コルメラが『農業論』第1巻「序論」で語る農業観は、ギリシア古来の価値観やローマの先達の農業観を単に継承するだけでなく、労働の価値、農業の価値を臆することなく全面に押し出す農本主義である。

For even if the state were destitute of professors of the afore-mentioned arts, still the commonwealth could prosper just as in the times of the ancients—for without the theatrical profession and even without case-pleaders cities were once happy enough, and will again be so; yet without tillers of the soil it is obvious that mankind can neither subsist

nor be fed.

(*On Angriculture*, vol. I, 7)

これまで述べてきたような技術の専門家がたとえいなくとも、国家としては古代のように栄えることはできるだろう。演劇専門家がいなくとも、弁護士がいなくとも、かつては十分に幸福であったし、今後ともそうであると言える。しかし、大地を耕す者がいなくなれば、人類は食べていくこともできないし、生存することさえできなくなる。

労働そのものの、あるいは農業そのものの絶対的な価値について、従来の農書は訴えてきた。しかし、コルメラは異業種と並べることによって農業を相対化し、人類生存の基盤になる技術であることを全面に押し出す。そして、あらゆる業種に教える者と学ぶ者の関係が制度として確立しているのに、農業にはそれが無いことを嘆く。宗教的な倫理観や社会的な倫理観以前の、生命を維持するという観点に立ち返った議論をコルメラは開始する。

If the precepts of this science were put in practice in the old-fashioned way, even in imprudent fashion by those without previous instruction (provided, however, that they were owners of the land), the business of husbandry would sustain smaller loss; for the diligence that goes with proprietorship would compensate in large measure the losses occasioned by lack of knowledge; (On Angriculture, vol. I, 9)

もし農業の教えが旧態依然とした方法で実践されても、あるいは、これまでに教えられたこともない人間に軽率に実践されたとしても（とはいえ、土地の所有者であればという前提はあるが）、農業経営の損失は比較的小さくて済むであろう。というのも、所有権が伴えば勤勉になり、知識不足による損失を大いに埋め合わせしてくれるからである。

アッシュ (Harrison Boyd Ash) の英文訳のように「この（農業の）科学の教え」と解釈すれば、前述のウァロの延長線上に農学を位置づけることが可能である。したがって、農業経験のない者でも教えに従って実践すれば、ある程度の収量は見込めるということになる。すなわち、誰が行っても再現可能であるという点で、ローマの農学は科学的な域に達しているという自負がコルメラにはあるように思える。

6. パラディウス『農事論』

パラディウス・ルティリウス・タウルス・イミリアヌス (Palladius Rutilius Taurus Aemilianus) についても詳しいことはわからない。4世紀後半から5世紀前半の人であると思われるが、名前から判断して身分は高く、祖先はガリアの出身であることを示す。現場重視の農業者で実践的な方法論が特徴である。コルメラに学ぶところも多く、実際に引用も頻繁に行われる。しかし、大部なコルメラの『農業論』は詳しすぎる上、不要な部分も多い。パラディウスの『農事論』(*Opus Agriculturae: The Work of Farming*) は大部分の農家を取り扱わない特殊な問題は省かれており、1月から12月までの作業が月別で説明されている (Fitch 11-13)。

コルメラの『農業論』が歴史に埋もれてしまい、発見されるまでに相当の時間を要したのに対し、パラディウスの『農事論』はその実用性、簡潔性が支持され、中世を通じて多数の写本が残る。ただし、各国語に翻訳されるのはルネサンス期に入ってからである。イタリア語のフィレンツェ方言の翻訳が

1350年、ウンブリア方言のものが1526年、フランチェスコ・サンソヴィーノ (Francesco Sansovino) による版が1560年にそれぞれ出ている。14世紀の後半にはカタロニア語、1554年にはフランス語に翻訳される。1442年頃には英語に翻訳されるが、これはグロスター公爵ハンフリー (Humfrey of Lancaster, 1st Duke of Gloucester, 1390-1447) に委託されたもので、公爵家牧師トマス・ノートン (Thomas Norton) の訳と考えられている。この時期、グロスター公所蔵の写本の多くがオクスフォード大学に寄贈されている (Fitch 22-23)。

パラディウスの『農事論』は印刷技術の発達に伴い、翻訳および改作が数多く出回るようになり、1472年から1543年の71年間に20種類もの版本が確認されている。しかし、その後は各地域に合わせた農書がその地域の言葉で書かれるようになったため、パラディウスの時代は終わる。それでも、農書の主流をなしてきたのはパラディウスであり、その主流に乗せてローマ農業の専門知識が中世からルネサンス初期に流れ込んだことは間違いない (Fitch 26-27)。

Common sense requires that you first access the kind of person you intend to advise. If you want to make some into a farmer, you should not emulate the skills and eloquence of a rhetorician, as most instructors have done. By speaking in a sophisticated way to country folk, they have achieved the result that their instructions cannot be understood even by the most sophisticated. But we must avoid a protracted preface, so as not to imitate those we are criticizing.

(*The Work of Farming*, 35)

常識を働かせばわかるのだが、先ずは助言したい人物が誰なのかということである。誰かを農夫にしたいと思うのなら、これまでの教え方に倣って、雄弁家の技巧や話術を真似しないことだ。田舎の人間に洗練された言葉で語りかけてきた結果がどうか。その教えが最も洗練された人間にさえ理解されないという結論を導いてきたではないか。しかし、長々と序文を述べるのもやめておこう。こうして批判をしている者たちの模倣となりかねない。

これはフィッチ (John G. Fitch) による現代訳であるが、念のために、1872年に初期英語テキスト協会 (Early English Text Society) から出たロッジ (Barton Lodge) 編の写本から起こしたテキストをあげておく。

Consideraunce is taken atte prudence
 What mon me moost enforme; and husbondrie
 No rethorick doo teche or eloquence;
 As sum have doon hemself to magnifie.
 What com therof? That wyse men folie
 Her words helde. Yit other thus to blame
 We styntte, in cas men doo by us the same.

ロッジはマージナル・ノートとして、「農業に美辞麗句は不要である。間違った考え方をして、自画自賛に陥ってしまう」(No rhetoric is necessary for husbandry, though some have thought differently, to magnify themselves.) と注釈している。また「この本文の詩の形態および構造から判断してチョーサー

一の少し後の時代である」(Preface 5)と検証している点は的確な指摘であった。

いずれにしても、この短い序文から見て取れる通り、パラディウスの農業観は極めて合理的である。15世紀以降の翻訳を通じて、それがヨーロッパ各国に伝播していったとすれば、その後の農書の方向性は自ずと明らかになるはずである。しかし、初期近代のイングランドで著される農書は必ずしもパラディウスから出発するわけではない。カトー、ウァロ、コルメラ、パラディウスの農書がヴェニスで1巻本にまとめられて出版されるのが1470年。以降、これがイングランドに伝わり、1490年代にかけて知識人の間に広まって、1508年ウォルター・オブ・ヘンリー(Walter of Henley)の『農業』(*Husbandry*)に繋がっていくと推測されるからである(Thirsk 18-19)。

次章では、ローマ以降の中世イングランドの景観を検証しながら、初期近代に発掘される古代の農書とイングランド古農書について考える。

注

(1) ギリシア・ローマの古典作品からの引用は、原則としてローブ古典叢書(Loeb Classical Library)の対訳英文を使用し、その英文からの和文訳を添えておく(付記する数字は叢書の頁)。なお、「参考文献」にあげた原語からの邦訳書も随時参照させていただいた。

引用文献

- Blois, L. de and R. J. van der Spek. *An Introduction to the Ancient World*. Trans. Susan Mellor. London; Routledge, 1997.
- Caesar. *The Gallic War*. Trans. H. J. Edwards, C.B. William Heinemann Ltd. Cambridge, Massachusetts; Harvard UP, 1917.
- Cary, M. and T. J. Haarhoff. *Life & Thought in the Greek & Roman World*. London: Methuen & Co Ltd, 1940.
- Cato and Varro. *On Agriculture*. Trans. William Davis Hooper, 1934. Rev. Harrison Boyd Ash. Loeb Classical Library. Cambridge, Massachusetts: Harvard UP, 1935.
- Columella. *On Agriculture*. In Three Volumes. Trans. Harrison Boyd Ash. Loeb Classical Library. Cambridge, Massachusetts: Harvard UP, 1941, 1954, 1955.
- Finley, M. I. Ed. *The Legacy of Greece*. Oxford: OUP, 1981.
- Fitzherbert, Master. *The Book of Husbandry*. 1534. Ed. Walter W. Skeat. London: The English Dialect Society, 1882.
- Hesiod. *Theogony, Works and Days, Testimonia*. Ed and Trans. Glenn W. Most. Loeb Classical Library. Cambridge, Massachusetts: Harvard UP, 2006.
- Homer. *The Odyssey*. In Two Volumes. Trans. A. T. Murray. Loeb Classical Library. Cambridge, Massachusetts: Harvard UP, 1919.
- Palladius. *The Work of Farming*. Trans. John G. Fitch. Devon: Prospect Books, 2013.
- Palladius. *On Husbandrie*. 1420. Ed. Barton Lodge. The Early English Text Society. 1872. Reprint. New York: Kraus Reprint, 1988.
- Plutarch. *Plutarch's Lives II*. Trans. Bernadotte Perrin. Loeb Classic Library. Cambridge, Massachusetts: Harvard UP, 1914.
- Putnam, Michael C. J. *Virgil's Poem of the Earth: Studies in the Georgics*. Princeton: PUP, 1979.

- Scott, Charlotte. *Shakespeare's Nature: From Cultivation to Culture*. Oxford: OUP, 2014.
- Spier, Robert F. G. and Donald K. Anderson, Jr. 'Shakespeare and Farming: The Bard and Tusser.' in *Agricultural History*, Vol. 59. No.3, 1985.
- Thirsk, Joan. 'Making a Fresh Start'. *Culture and Cultivation in Early Modern England: Writing and the Land*. Ed. Michael Leslie and Timothy Raylor. Leister: Leister University Press, 1992.
- Virgil. *Eclogues, Georgics, Aeneid Book 1-6*. Trans. H. R. Fairclough, 1916. Rev. G.P. Goold. Loeb Classic Library. Cambridge, Massachusetts: Harvard UP, 1999.
- Wilkins, John M. and Shaun Hill. *Food in Ancient World*. Oxford: Blackwell Publishing, 2006.
- Xenophon. *Momoabilia, Oeconomicus, Symposium, Apology*. Trans. E. C. Marchant and O.J. Todd, 1923. Rev. Jeffrey Henderson. Loeb Classical Library. Cambridge, Massachusetts: Harvard UP, 2013.
- 飯沼二郎 『世界農業文化史』 八坂書房 1983
- 岩片磯雄 『古代ギリシアの農業と経済』 大明堂 1988
- 加用信文 『増訂版 イギリス古農書考』 御茶の水書房 1978、1989
- 小松芳喬 『イギリス農業革命の研究』 岩波書店 1961
- 塚田孝雄 『シーザーの晩餐』 時事通信社 1991
- 藤田幸一郎 『ヨーロッパ農村景観論』 日本経済評論社 2014
- 宮寄麻子 『ローマ帝国の食糧供給と政治』 九州大学出版会 2011
- クセノフォン 『オイコノモコス』 越前谷悦子訳 リーベル出版 2010
- ブルクハルト、J 『ギリシア文化史』 第1巻 新井靖一訳 筑摩書房 1991

参考文献

- Hesiod. *Theogony and Works and Days*. Trans. M. L. West. Oxford World Classics, 1988.
- Homer. *The Odyssey*. Trans. E. V. Rieu. Penguin Books, 1946
- Markham, Gervase. *The English Husbandman, The First Part*. London: T.S. for John Browne, 1613.
- Markham, Gervase. *The English Housewife*. 1615. Ed. Michael R. Best. Quebec: McGill-Queen's University Press, 1986.
- Virgil. *Georgics*. Trans. Peter Fallon. Oxford World Classics, 2004.
- 飯沼二郎 『風土と歴史』 岩波新書 1970
- 伊藤貞夫 『古代ギリシアの歴史』 講談社学術文庫 2004
- 和辻哲郎 『風土』 1935 岩波文庫 1979
- ウエルギリウス 『牧歌・農耕詩』 河津千代訳 未来社 1981
- ウエルギリウス 『牧歌／農耕詩』 小川正廣訳 京都大学学術出版会 2004
- カエサル 『ガリア戦記』 國原吉之助訳 講談社学術文庫 1994
- プルタルコス 『プルタルコス英雄伝』 (中) 村川堅太郎編 ちくま文庫 1987
- ヘシオドス 『神統記』 廣川洋一訳 岩波文庫 1984
- ヘシオドス 『仕事と日』 松平千秋訳 岩波文庫 1986
- ヘシオドス 『全作品』 中務哲郎訳 京都大学学術出版会 2013
- ホメロス 『オデュッセイア』 (上) (下) 松平千秋訳 岩波文庫 1994